

やはり新垣さんは、沖縄全県民と同じように、中城においても、鬼畜米英という日本軍、日本の戦争指導者の宣伝が何よりも悪かった、住民を犠牲にしたと述べられた。すなわち、もし捕虜になれば、男はブルドーザーで轢き殺され、女は連れ去られて、血に狂う鬼畜の米英兵の毒牙に曝される、とのことであった。したがって、米軍の宣撫の言葉を欺瞞だとして生命を失つたもののが多かつたことを話されたのである。

暴風雨来で、戸外は砂塵が吹きまくって、講堂内の座談会の卓上にも砂ほこりが積つたが、城間村長、新垣中教委員長をはじめ、深夜の迫るもの忘れて話がつづけられた。

城間間盛栄(二十七歳) 役所職員、防衛隊

三月二十四、五日頃から中城湾を基点とする米艦隊の艦砲射撃とともに空襲が開始されたわけです。

そうして艦砲射撃、空襲が毎日激しくなっていき、その当時村民も命令によって久志村一帯に非戦闘員は疎開するよう命方が下つたと思っております。それで各部落にその手配をさせて、疎開を始めたと思っておりますが、その後戦闘員はできるだけ、若い男女がそれに加わって戦争に協力するようという命令が出て、わたしも当時は村の森林組合技手として在職中でありますましたが、防衛隊としての待期命令を受けていました。ところが上陸間際になつても召集命令は来なくて、村の若い防衛隊に召集されてない連中が自発的に防衛指導者の呼びかけによって、中城城趾に三月三十日、集まる

ように命令を受けて、みんなが集合し、それで一応家へ帰つて食糧を携帯して来るようなどいふことで、さるに四月一日の晚中城城趾に集合したわけですが、それからすぐ喜舎場国民学校に引率され、そこで石部隊の賀谷部隊ですが、そこで訓辞を受けて、その晩武器を手渡されたわけです。その小銃の武器を渡されると、敵の上陸地点の北谷へ、その後武器をもつて、援護部隊として、われわれは応援にやらされたのですが、暗い闇の中で崖から下りたり上つたりして、今の桃原付近でしよう、その一帯の山を下りて敵に立ち向かおうとやつているが、敵の砲火の激しさは寸土の前進もゆるさない。情報も敵の大部隊がすぐ前に乗り込んで来ているということで、結局、屋宜原(北中城村)に引き揚げたんです。屋宜原でいよいよ砲壘を掘つて、戦闘体制を整えたのですが、夜が明けて見ると、そこは岩ばかりで、壕は掘れない。それでも体をいれる鉛壘を掘らねばならないのであるが、空襲の集中射撃で、とうとうそこにいることはできない。追いまくられて、ついに屋宜原の今低い地帶にあり壕の方に避難した。避難している時に、さらに監視を山の上にあげたら島袋一帯は、すでに敵の戦車が入つて攻撃を開始している。そこで壕から全部營営場に引き揚げるようなどいふことで、飛行機の空襲下に真昼、喜舎場の方に三時頃から引き揚げたんだが、夕方までにやつと喜舎場に迫りついて、喜舎場に行つて見ると、北谷部隊あたりから、日本軍の怪我人が右往左往して喜舎場部落にどんどん逃げ隠れするという中を(四月二日)、われわれは、中城城趾に迫りついたのです。迫りついたらその一帯はほとんど難民も大騒動している。

そこでわれわれ防衛隊は、そこから一段と下つて今度は北上原の第一六一高地に移つたんです。そこでは、賀谷部隊もいつしょです。そこでさらにわれわれは、その一六一高地の陣地の中から一応二、三名の同僚とともにわたしは自分の部落ですから家に寄つて、家族をみんな追い出しましたが、南部の方に下れ、敵は上陸しているからと、それで食糧も全部担いで家族は行つたわけですが、そ

うしているうちに砲弾がうちの畜舎の方に落ちたわけですよ。そうしたら馬も山羊も全部吹つ飛んでしまった。われわれは奇蹟的に母屋のそばにいたので助かつたんですがね、それでまた引っ返して北上原の一六一高地へ戻つて見ると、すでに敵は新垣部落(中城村)の沿道一帯に戦車がどんどん押し寄せて来る、一六一高地を目がけて、攻撃体制が取られているという中で、その晩は、さらにわれわれは一步後退して、西原村の幸地部落に引き上げて、正規の中隊といつしょにその壕に入つたわけです。

そこで、その晩、それは四月五日頃ですかね、わたしは幸地の壕で、棚原の壕から北中城の城間という方と偵察隊として派遣されることになつて、民間の着物を着て変装し、南上原を行つて、南上原部落の中央部の南寄りの東に当る糸蒲(いとがま)に辿りついたら、そこが第一線になつておつたんですね。そうして津霸の国民学校の上方の丘から南上原にかけての丘一帯は(南上原部落は南北の距離が長いが台地にあって、東は陵丘をつくつて下の平地へ崖になつて下つている)アメリカ軍が裸(上半身)になつて、穴を掘つているんです。それを朝目撃して、さらに晩には普天間一帯の敵陣地の中まで入り込んで偵察しようとした予定を立てた。ところが、照明弾とか、小

銃とか、威嚇射撃が絶え間なく、なかなか進むことができなかつたが、一步踏み込んで奥間部落の上まで行つたんです。それでその山の上に辿りついて見たら奥間部落は、すでに瓦斯ランプ(ガスランプ)が一面に点いて晃晃(ヒラヒラ)と明るく、そこに米軍がいっぱい入つてゐる。そうして校庭は砲陣地になつていて、そこからどんどん大砲を撃つている。

それを見つては、とてもそれより先には入れないと思って、伊佐浜の方へ戻つたのですが、伊佐浜(ママ)へ迫りついた時は、一晩中歩き通じで夜明けになつてましたんですね。わたしは敵の占領地域を突破して、もっとと偵察して見ようと提案したが、同僚は、夜が明けると引き返そうという。そうする中に夜は明けたので、結局引つ返すほかなく、引き返して糸蒲の友軍陣地の中に入つたわけでした。その日の朝の十時頃でした。今度は、この陣地から同じ南上原境内の赤森という丘があるんですがね、そこへ戦闘攻撃に出かけたわけです。その日、いつしょに攻撃へ出た兵隊の中には、アメリカ兵の皮バンドとか、チューインガムとかチヨコレートとか女の写真などを戦利品として持つて来て、皆に見せた兵隊もありました。

南上原の糸蒲の近くでは、球部隊と石部隊の戦車攻撃の競争をする状態となつて、互に戦果を持つて帰らねばならないということになりました。その戦車攻撃では、両方とも確かに戦果を持つて来てありました。わたしたちは石部隊で、わたしは戦車攻撃に出ませんで壕の中で戦況を見ていました。糸蒲の南上原の端に、わが軍の陣地がありましたね、その陣地一帯へ向かつて敵の砲火は雨霰と打ち込まれて

いるわけです。ところが、その陣地へ、モノペ姿で弾薬を背負った女子挺身隊が各個躍進して行くんですね。それは、われわれの壕からよく見える、わが沖縄の若い乙女たちの挺身隊です。その陣地へ辿りついて行くさまを見て、おのずから頭が下り涙が不覚にも出ましたね。それは、兵隊の後について、兵隊同様全然足の鈍ることもなく、女子挺身隊は、こうも活躍しているのかと、すっかり感泣させられました。

そうこうして日がくれると同時に引きあげたんですがね。引きあげて見たら、われわれの壕は全部焼かれてですね、そして兵隊が死んでるんですね、全部。壕の入口に砲弾が落ちたんでしようね、中の方には弾薬なんかも持っていたから、それも全部破裂したんでしようね、その壕は幸地部落の端になっているがその左がわにあつたんです。

その近くの壕にいて助かった兵隊が、四、五人残っていましたが、その兵隊たちは、本部はすでに浦添村の前田へ行っているとい

うので、前田へ向かつて移動しました。

われわれはそうして前田の壕に入ったわけですが、その翌日の晩、部隊は、棚原の戦闘参加へ前進して行きました。それでわれわれは、今度は食糧を棚原の陣地へ運んでいたんですけど、そこへ防衛隊は第一線を守れということで、棚原の丘の方にある壕へ移されることになつたんですね。その時わたしは、生命の危惧を感じたために、その棚原部落の丘の上の蝋燭壇に入ったわけです。入つたら今度は、南上原の喜納坂というところがありますがね、喜納坂の道沿いに糸蒲から攻めて来たアメリカ兵の攻撃を受けたわけです。そし

その運んで行く途中ですが、戦線の一帯は勿論ですが、首里に辿りつくまでの全道程が弾はほんとに雨霰のように落ちるんですね。それは夜昏の差別なく弾がこんなに落ちるものだから、田圃も、畦道もいくらいやられてるんですね。

そういう中を患者を取りにくく、それを運んで帰る、病院の前に唐者を下すと、すぐに取りにくく。それで、お互同僚の中には、その行き帰りの途中で、弾に当つて即死した例もあつたし、重傷を負つたり、ほとんどのものが弾の洗礼を受けた。

そういう苦労をつづけていつて、そういう中で前田に戻つた最後の日には、もう包囲態勢になつてゐるんですね。その中で退去命令が出て浦添に下つたんだが、その時の大隊長は賀谷大佐で、二日包囲されている中から首里に引き上げて、首里の平良ですか儀保ですか、今割りがあるでしょう、その左がわの壕だつたですがね、前田から後退してそこへ入つたんです。

そこで、わたしと北中城の今助役の善八さんと、もうひとりほかの人と三人が、連玉森を通して、与那原へ出て、それから普天間あたりへ廻つて、そこの敵を偵察して来いと、また命令が出

て蛸壺の中にポンポン打ち込まれたわけです。それで壕にいた同僚たちは、わたしが死んだものと想像していたそうですが、わたしは蛸壺の中に弾が止むまでしゃがんでいて、弾が少し止んだから飛び出して壕に帰つたんですね。そうすると同僚たちは、奇蹟的に生きたんだと非常に喜んでいました。ところがわたしは、蛸壺に帶剣を忘れてるんですね。それに気づいたので、また弾の中を取つて來ました。

さらにその晩からアメリカの攻撃は激しくて、棚原の一線部隊の負傷者の輸送です。棚原の部落の下に病院があつたんです。そこへ患者を輸送していたんですね。すると今度は、前田への後退命令です。前田へ引きあげて見ると、嘉数（宜野湾市の西南の部落）の線と浦添のユウドレ（現在の一号線の牧港から東西に連なる沖縄特有の稜線の浦添城趾一帯で、断崖を削り抜いて、文化財の英祖王、尚寧王の墓陵がある）といいますか、その線はもう激戦ですよ。

それでわれわれは、首里の野戰病院への患者運びです。野戰病院は、首里の赤田にあつたんです。あつちに友軍の壕があつたので、そこが野戰病院だったわけです。そして浦添村の前田部落から毎晩、その首里の野戰病院へ患者（負傷者）輸送です。

その浦添の患者輸送の段階で、嘉数の線から西原小に来て、その戦闘の撃ち合いの結果、アメリカ軍は、われわれが前田の壕にいる中に、前田部落に入つてゐるんです。そうしてもう敵は、われわれのいる壕から見えるんですね、昼は。夜になると引きあげて行くが昼は三百メーターまで接近して、戦車を持ち込んで攻撃するんで

たんですよ。そうしてわれわれは出発した。大名（与那原から首里へ上る途中の部落）まで行くと、まだ家が残つていたので、人家に入つた。するとレコードがあつたですよ。居間なのに、そこにいた兵隊たちは、それをかけてジャンジャンやつておるんですね。その音を聞いてですか飛行機が偵察していたですよ。その時は、雨も降つて霧がかかつてたもんですから何のこともないといつて火炎瓶を持って、戦車でも攻撃する体制で行つたんだが、連玉森あたりを偵察して見ると、連玉森はすでにアメリカに占領されておる。その裏の丘、そこはけわしい丘だが、まだ友軍が頑張つておる。そこまで覗いて見たら、霧がかかつてているもんだから、まだ大丈夫と視界がないから。そうしたらその周囲は全部兵隊が死んで転がつておるんですね。結局、機関銃とか何とか、アメリカ軍に全部やられて後退している状態で、壕も爆撃されてる。ここは、どうにもならない危険だと見て、一応下つて、また大名に戻つて来たら、南風原村の宮城ですか、あの宮城の長い丘一帯に大きな幕を張つてですねアメリカが。飛行機との連絡を取つていて。

そうしてすでに首里は包囲されている状態だということを、われわれはその晩帰つて本部に報告したら、もうほとんどの部隊が首里から下つていつたでしょうね、われわれは最後だつたと思うんですね。そしてその晩で島尻に後退命令。雨の中を全部物資を担いで、それは五月の大体十七、八日頃でないかと思いますがね（二十七、八日の記憶違いと思われる）。神里部落、大里村ですか、その神里部落の壕に入つたわけです、移動してですね。その移動に当つて、われわれは食糧品をはじめいろいろ持つて來たんですが、その

防衛隊の中から食糧品を持った連中が逃げたのがいたわけですよ、そのまま担いでもうあからは。そうしたもんだからわたしは賀谷部隊長に呼びつけられて、副官も呼びつけられて、あれはどうしたかあの食糧品は、酒類とか罐詰類とかは。それでわたしは、それはあなたからわたしは指揮せよという命令は受けていない、わたしは自分に与えられた荷物だけを持って来たんだといったんですが、それで副官は、相当責められていたんですが、その時牛島中将もおられたわけです。（これは多分牛島中将ではないようである。球部隊の最高指揮官と間違えてはいないかと思われる）球部隊の、その人もこっちにいたんです。そうして賀谷部隊長が油しほつていると、もう日本刀で切るうというところまで来ていたんですよ、副官を、またわざしまでも。怒っているもんだから。それがやつとおさまったが。

それからさらに神里の壕で、今度は敵の攻撃が来たわけですねその朝。そうしたらその壕の上でわれわれも配置していたのだが、敵の来るのがわからないもんだから、いつの間にかわれわれの陣地の山に上ってしまったんですアメリカーは。そこで手榴弾をどんどんもうわれわれは攻撃されて、敵前を全部抜けたわけです。その逃げる中をやられる連中も出る。われわれもその中を奇蹟的に生き抜いたわけですね、機関銃もどんどんやっているでしょう。その中を逃げて行つて、それから翌日の晩は別の陣地に移つてから、今度は、晩に迫撃砲攻撃をしたわれわれはね。それはやはり神里の丘ですね、そのそばの丘です。やつたらですね、ちょうど三分隊にわかれて、第一班、第二班、第三班とわかれてやつたんですが、そ

の時第一班で先に出たのがおりますが、わたしは三班で、そうして山の崩れたところから上つたわけですが、山のてっぺんから敵が見えるんですね。それで撃とうとしたら弾が出ないんですね、鉄砲は銷しているからもう実際は。その武器は価値がないんですね。そしてこれはもう駄目だと斜めに下つたら相手は察知しているから手榴弾をボンボン投げるわけです。ところがわれわれは上の高いところから斜めに下つてよこになつたんだから、手榴弾は真とも当らない。犠牲にならなかつたのですが、そうして下つて見たら、第一班のもので、正直に敵と勝負に出て、上に登つたものが、やられたといつたんです。訊いて見たらそれが役所に勤めておつた金城三郎さんでした。渡口の金城三郎さんがやられたわけです。それでわたしは、上つて行つて、敵の前から足を引っ張つて下して来て、土の中に埋めましたよ。

それからわれわれは南へ下つて、ずっと米須まで下つて部隊の所在地をさがしたのですが、それがわからんですね。もう混同しているんですね。結局そこに入つてしまつて、さらに具志頭の波名城というところにそれは六月の二十日頃でしような、米須からそこへ来て攻撃に出たら、晩ですから砲弾を撃つのが見えるもんだから、これは友軍だと思ったわけです。それは錯覚起したわけですね、それでその目標に行って、その山を背景にして向かっていたんですねわれわれは。ところが夜が明けて見たら敵だもんだから、右往左往して逃げて、そうしてうち込まれてね、ちょうど竹敷があつたのでそこに入り込んだんだが、兵隊もいっしょに、戦車爆薬を持っているんですね。そうしたらその中に戦車砲を撃ち込まれて、全部爆発

してしまつて、大分死んだわけですよ。その中に、今の琉球政府の総務局長、善八さん、わたくしと三名、互に水を分け合つて飲んでからですよ。やられたもんだから、わたしはわたしのことしかわからんですがね。それで、これはもう頭やられている。だんだん意識がなくなるので、あはあ、これは怪我は大きいんだというふうに考えた。そして意識を失つていたわけだが、いつしか意識を取り戻したのでハンケチを出して顔を拭いたら、ハンケチに血がついている。破片で顔がやられているわけですね。それから振り返つて見た
ら善八さんも局長（総務局長）も同じ考え方ですね。いつしょに爆風で意識を失つて、いつしょに意識が戻つたわけですな。それから互にどこも怪我はないかと話し合つて、どうもないといつ合つたんです。それからまた山の上に出て、敵前を山の中に這い上つてまた米須の山一帯に隠れたんだが、その隠れ場は何ものもないですね。阿壇ですか、葉の繁つた下に入ったわけですがね。弾や空襲はどんどん来るし、その中でちようど同僚のひとりがびくびくして、腹を上にして阿壇の下に入つてしまつたのです。われわれは阿壇の葉の下で、これは仕様ない、どうにもならんと思ったんだが、この人は腹を上にして入つてしまつたので、そしたら砲弾の破片が腹に当つて、全部腸がやられて即死した。そういう状態も同僚の中にいまし
た、場所は福地です。これは中城の人ではなく、もうその時は、混同していましたので、他の村の人でした。

そこで、同僚五、六名は残つていたですが、米須の上の丘で一応避難していると、陸はアメリカに攻められて来ている。海は敵の舟艇が海面が見えないくらいにいっぱいして、すでに上陸を始めてい

る。
こういう状況だから、あとに残がされているのは摩文仁の丘の一角だけであるということはつきりしている。それであの摩文仁が丘のあの一角の壕に入つたですね、避難したわけです、そこに。この避難している五、六名の同僚は、さらに、そこを抜け出そうといつて、出たわけですよ。わたしはあるの時、顔がはれていたんですね、爆風にやられた後ですから。目もよく見えないもんだから、少し遅れてしまつたんですね。そうして、ひとり幼い上つて、あの摩文仁が丘の岩の中をうろついて、海岸に辿り着こうという時に、そこに自分の部落の西国吉（いりにし）というところの家族がおるわけですね、北上原のわたしの部落の家族です。そこで昼飯も貰つて食べた。そこで今度はその家族からその息子を頼まれたわけですよ。この息子を連れて行つて、ぜひ生命が助かるようにしてくれといふんですね、いくらか安全なところは、前にもいいましたが、まあ、摩文仁の一角にしか残つてないので、どんどん弾が撃ち込まれるんですね。その中を抜けて行こうというわけです。そこで、こうなつては防衛服を脱ぎ捨てて、民間の着物に着替えるほかはないと思って、一般民間服をつけたんですね。そうしてその息子といつしょに海岸伝いに、海岸に群れ広がつてつづいている岩の中を辿つて具志頭から逃げようとしたわけですよ。そうしたら具志頭の手前、摩文仁の丘から遮断されておるんですね。アメリカ軍は、蟻一つ通さない厳重な遮断警備ですね。上からも放送して、全部丘に上れといつておる。それでもわれわれは何とかしてそこを突破しようと、海岸沿いに行つたら、海は波打ち際も浜辺も死体ばかりで、海に浮いて

いる死体をかきわけながら行つて、岩の陰に入つて見たらまたそこ

にもう一家族、うちの部落の女ばかりのがおるんですよ。それには歩くことの出来ない子供がおるんですね。その子供をおんぶさせられて、海岸べりを渡つて行つたら、具志頭の手前で遮断しているもんだから、とうとうどうにもならなくて、家族とともに上つたわけです。手榴弾も持つておりますが、途中で捨てたんです。そうして一応上つて見たら、捕虜になつたわけですね、部落の連中といつしよに。

こういうことで捕虜になつたらですね、わたしたちの目の前に死体を置いてあるんですよ、殺した死体ですね。つまり訊問するのに、嘘を吐いたら、このような状態にするぞと見せつけて訊問するわけですよ。だがわたしは腹を決めてあつたんです。というのは、わたしの家族の女子供は、全部国頭（郡）に疎開させてあつたんですね。それで、こうなれば家族はどうしているか、そういう立場から、まず最後まで頑張つて見よう。捕虜になつて家族とあつて見よう。あえるかどうか、生きているかどうか、もしそれがこのみじめな沖縄の状態にでもなつて、家族もいなくなつてゐるとなれば、アメリカ軍に抵抗すればすぐ殺されるから問題はない、という考え方で、いつしょの家族とともに捕虜になつたわけですね。そうしてそれからわたしは嘘を吐いたわけですね。民間服をつけてるし、子供たちはつれているし。それでわたしは、防衛隊の待期命令は受けていたが、役所に勤めてる関係上いろいろな仕事があつて、待期命令を受けていただけで、軍隊の活動できなかつた、といったんですね。そしたら、何の疑いも持たれずやすく通つたわけですよ。

そうしたら、具志頭の役所の前に収容所があつたですね、そこにぶち込まれたわけです。若い連中は一般収容所にいれられたが、わたしはさらには抜き出されて、具志頭のアメリカの病院がありましたね、個人病院のあつたあとが、アメリカ軍の病院になつたんじやなかつたですかね。あそこへ連れられて行つて、わたしは塵や紙屑などを埋める役目をさせられました。それに、まず穴掘り作業ですね、穴を掘つたら塵や紙屑類を埋めるわけです。ところがその紙屑の中には、砂糖もあればチヨコレートもあるし、それを食べたらうまいもんですから、紙屑に混じっているそういうものを作り出して食べました。それからお昼を食べに連れられて行つた。ケースに入ったのを渡し、コーヒーも飲ます、これは素晴らしいことだと思ってやつていましたが、今度はさらに看護兵という治療係にされました。

その中にそこは解散になりましたが、その場合は、軍のトラックに乗せられて、毛布もくれたですよ。そうして後退ですが、その下つたところは百名ですか、百名の方に行つたら憲兵に避難民たちもみんな下されたんです。連れて来た兵隊は帰つて行つて、知念の収容所まで百名から歩かされたわけですよ。そこにぶち込まれるとまたいろいろと訊問が始まるんですね。そこを切り抜けたら今度はまた那覇の古波蔵の今國家衛生試験所がありますね、そこにも収容所があつて移されました。そこで作業をしていると、そこでもまたまた訊問された。防衛隊の待期命令は受けていたが、一般的の労働しかしなかつたといったんですね。そうしたら、お前は兵隊の経歴はあるかというので、現役で行つて来たことがあると答えた。

「階級は何だ」

「上等兵」

「兵種は？」

「艦載兵です」

「それでは馬を引っ張つて輸送した経験があるか」

というので無いと言つてやつたんです。それでそのまま作業をつづけていましたが、またまた「福山」の方へ移されました。そこでは、便所掘りをさせられていきました。その便所掘り作業に明け暮れていたんですけど、やがて八月頃になつてました。そこはもう解散だ、各村の家族のところへ帰れ、ということになりました。その前のことですが、家族はわたしが福山にいるということを聞いたんでしようね、家族は久志村の瀬戸部落にいたんですけど家内が面会に来たんですよ。それでわたしは瀬戸の家族のところへ行つた。そうしてわたしは、瀬戸市役所の労務課に入つたわけです。その時は、あちこちに幾つか市があつたんです。瀬戸も一つの市、アメリカが作つたんですが、その時琉球政府の初代主席になつた比嘉秀平さんが瀬戸市役所にいらして、次長でした。瀬戸長清先生が市長、今の文教図書社長の当銘さんもそこにいらされた。わたくしの労務担当は、嘉陽、安部又などでした。

それから、家族とともに、安谷屋に移動になつたんですね。安谷屋へ来たら、中城村の新垣部落・登火・北上原の住民の受け入れ態勢をつくるために、まずうちを建てさせるなどの受け入れ隊長を命じられたわけです。

中城村の受け入れは一番目が当間で、当間から始まつて、二番目

は津覇、わたしの新垣グループは三番目になりました。

受け容れはして、各部落に入つたわけですが、問題は食糧です。それでわたしは、芋掘りをして食べるだけでは、後が困ることを考え、地主とか所有権とかということは考えないことにして、何よりも急場を凌ぐことが第一番だという観点から、土地を各家庭に割り当てて耕作させ、早く生産するようにさせました。そうしたら監督官は、伊佐という二世でしたが、お前は規則違反のことをしているから首だという、わたしはいいました。

「首でもいい、現在何よりも大事なことは食糧問題だ、食糧がなくては住民は大変である。土地を割り当てて、各自、みずから食糧作りをさせなくては、誰も食糧生産に誠意を持つて励むものはない、警察の連中だつて食糧の奪い合いを監視することはできなかろう」

そういうふうにやり合つて、結局割当て制で思つたよりも早く食糧は生産できて、芋の点では割合いに豊富でした。

そういうふうにして、中城全部の各部落の住民が、自分の部落に移動して、変り果てた元の部落を整えるようになりました。

大体戦争中のことを申しましたが、その間に最も印象的なことと訊かれますと、戦闘が開始されて、北谷から摩文仁の先へ行つた間、食糧は何を食べたか、全然記憶がないですね。前田の戦線では握り飯を食べたのは憶えているが、その外では、壕の前の小川ですね、馬が死んで倒れている。人間もすい分死体であちこちに倒れておる。そうして死んだ馬や死んだ人間を洗つて水が流れている。その水を汲んで飲んでいるんですけどね。また食べ物ですが、飯は炊

くことは炊くんですね、敵の砲爆撃の合間に見はからつて。ですか

ら場合によつては一回に三日分も炊くんですね。それで、握つてある飯は、ねばりがあつて、糸を引いて、ほとんど腐りかけているんですね。それを平気で食べておるんですよ。それでも病気にならないといふのは、やっぱり人間の緊張した精神力というものは恐ろしい力だと思いましたですね。人間の生命は意志の力、精神の力によつて、大きく左右されるものだということを思いました。

家族については、久志の安部又には親戚もいましたので大して酷い目に遭わなかつたようですが、後では、名護（西海岸）まで芋さがしに行つたそうです。

わたしの家族は、これこそほんとに奇蹟的に全員無事でした。全員七名元氣です。当時お父さんはお店をしていましてまだ若かつたし、兄もいつしよで、隣りから馬を引つ張つて来て、米二俵積んで南へ下つたんですが、首里のどこかの壕で、ずいぶん長らくいたそです。それから最後には、真壁あたりで兄といつしよに、捕虜になつたんだそうです。

米軍が沖縄本島を北谷で切斷したので、その南がわ、中南部の住民で、あの戦争で家族全員が一人の死者もなく戦後互に顔を合わせることのできた家は、ほかに例がないのではないかと思つたりしていました。空き屋敷のままになつていています。まったく、悲惨な戦争だったとつ

くづく思います。このようにいつぶんに四戸が全滅しているんです。

安 里 龜（五十二歳） 産業組合購買部員

敵の上陸前までずっと、役場に通つていた。最も役場に近いのはあなただから、万一の場合は、金庫にある金を全部持ち出すようにという命令を受けっていた。

四月一日、敵が上陸した情報を聞いてからは、ほとんどの職員が役場に見えなかつた。空襲は激しいし、職員は見えないので、命じられた通り、金庫の金を有つただけ持つて、自分の部落に自分でつくつた壕を行つた。しかしそれでは危いと思ったので、自然公園の下に、自然壕みたいのがあつたので、わたしの家族と先輩の安里ゲン吉さんとそこに二晩くらい泊つて、そうして四月三日の十時頃か、

あるいは十二時頃か、友軍が、わたしたちのおる壕の上に来て、久場岬に向けて機関銃を撃ち込んだ。壕で聞こえたので、丘の方へ上って見たら、友軍の兵隊がいうのに、君たちはまだそこにいるのか、敵は今そこまで来ているぞという。久場崎の方を見たら、背丈の高い軍服をつけた兵隊が見える。そしてその兵隊の上から威嚇のつもりで、機関銃を放射したんです。

それからわたしは壕に帰つて、安里ゲン吉さんにお話しして、早く南の方へ行つたがいいといって、二、三十名の人数でしたが、壕

から出た。首里に向かつて行く時から、空襲が激しくですね、ようやく新垣部落（同村）まで辿りついで、自然壕から新垣部落まで、約半日もかかつて届いた。晩は空襲がなくなるから晩まで待とうと、新垣部落において、晩の六時頃なつてから山かけたが、新垣部落を出てそう遠く行かない時に、飛行機が上から来た。空襲はしなかつたが、危いというのでキビ煙の中に入つて隠れていた。飛行機が行つていなくなつたので、それから南上原を通つたんです。南上原を通る中に、吉田少尉といつたですがね、この一帯から道路の中に芝を植えてあるところがあるが、そこには地雷を埋めてあるから注意しろ、という注意を与えられた。それから棚原という部落、西原村のそこへ行つた、その棚原の部落は全部焼けている。

それで、ここには避難所が無いから首里に行こうということになつて、空襲のない暗くなつてから棚原部落を行つた。それで空襲にはあわなかつた。そうして首里の入口、石嶺に行つた。政府がつくれた壕ですかね、二階の壕があつたんです。そこには兵隊がいたので、先輩の安里ゲン吉さんが行つて、兵隊に、われわれは中城村の者だが、友軍から命令されて、首里に行けといわれて來たが、適当の壕がないので助けてくれないだらうかと交渉したら、われわれはあとで立ちのくから、あなたがたは適当のところに避難しておきなさいとのことで、墓に入つて隠れておつたですが、十時頃になつたらその兵隊たちは皆出たんですよ。それでそこへ入つて、これが四月三日だったですから、そうしてその壕は政府がつかったのか、二階で梯子もあつたが、そこに二週間くらいおつた。

そこにおる時に友軍に聞かされたが、あの前田山は、首里の外廊

になつていて、そこで敵をくい止めるから心配しないでいい、と友軍がいう。ああそらかなと安心していたが、二週間くらいしたら臼砲という直射砲を据えつけおる、直射砲ですね。そうしてここは危いからあなた方島尻に下つた方がいいといわれて、それで家族を引きつれて、すぐ島尻として行く。坂下のですね、離詰工場の民家の墓を開けて避難していたが、そこは球菜（キャベツのこと）なんか野菜類も芋も畑にあるのでそこで約二週間くらい食いつなぎしておつたが、そこも空襲が激しくなつて、移動しなければならないことになつて、坂下から出て、真和志村役場のところを通つて、国場の部落に下りて行つて、国場の上の三叉路は非常に危険なところだからといって注意されておつたけれど無事にそこを通つて、真玉橋は破壊されていた。それで今の南部農林高等学校のところへ廻つて、津嘉山部落、友寄、山川、それから東風平村の世名城よなぐすくを通り、具志頭村の後原ごしまる、といふところに辿りついた。その時は暗くて物が見えないが、後原の川のところに行つたら、静かで戦争は全然ないようであった。首里から後原まで、一日かかつて来て、木の下に一夜泊つた。壕が夜だからさがすことはできなかつた。

翌日は、朝起きるとゲン吉さんといつしよに芋取りに出かけた。後原の人が畑を廻つて芋盗人がいなかつたといつたんだろう、わたしたちを見て、なぜ人の畑から勝手に芋を盗むか、取つてはいけない、と責められて芋は取り上げられました。やむなくまた壕に引つ返して來た、それは五月一日です。

具志頭に行つてからは、芋も取れないし、野菜も取れない。次に

で、これをみんなで取り出して安全地帯においた。首里の松川で四家族十二名が島尻へ向つて歩きつづけて具志頭村後原に辿りついで、五月一日から六月二、三日まで、食い物をあさること心にまかせないで、日を過した。

壕にいる時にわたしの次女が産気づいてですね、どうするかと非常に心配しましたが、隣りの壕の婦人がね、そこに仲真という人がいるから自然壕の病院に、そこに頼みなさいと教えられた。それでわたしはゲン吉さんにお願いして、いつしよに具志頭村の仲真さんのところへ行って、産気づいているが初産で非常に心配しているので診て頂き度いとお願ひしたら、即座に、ああそうか、連れていまいということで、ゲン吉さんと二人で、谷底からわたしの次女を畚に乗せて担いで行きましてね、あそこでお産をさせたんです。この子供は今おります。二十五歳になつていますが女の子です。生れたのは、昭和二十年の六月三日ですからね。

その子供が出来て三日目にここにいられないというので、糸満に行くつもりで、どこを歩いてるかわからんで、東風平村の富盛に行つたんですよ。富盛の手前の田圃で迫撃砲に追われてですね、前にどんどん落ちるが、われわれは一人も怪我しない。

そこから空襲や弾が激しくて軍も民も大騒ぎで、具志頭村安里部落へ行って、そこに空き屋があつたんです。そこに、同じ中城村の安里部落の人が二、三名、われわれより先に入つていたのであったが、われわれが行くと、早く入りなさいといつて、一晩ここにいました。

具志頭村後原にいた時、わたしと十六になるわたしの娘とは、軍

ことについては、日撃者の話が他で話される)。

後原を出て富盛、具志頭村安里、大屯、そこでわたしは、二女が子供を産んで疲れて歩けないので、安里ゲン吉さんたちの家族と別れました。そして具志頭村の波名城部落の何とかいうところの道ばたの穴の口に、その穴は口だけはあいていたからそこに二日泊つたんです。

アメリカ軍は近くの八重瀬岳を攻撃している。それでこゝも安心できないといって、ここから出て、真壁村の真栄平部落へ。そこへ行つても入る壕はない。弾はますます激しい、わたしは、そこで兵隊に、二女のことを、これを見て下さい、お産してまだ四日にしかならない、われわれも入れて下さいと頼んだら、その兵隊は、はいともいやとも言わない。それでわれわれは、ちよととした仮小屋に入れられたが、しかし安全ではないよと言われ、一晩泊めて貰つた。そこでも弾は激しく、すぐ目の前から迫撃砲が何か知らんがとんできて、五、六メートル先に突込んでから煙を出していた。非常に危険なところであった。

それからまあ、ここにもいられない。真壁村真栄平から新垣(真壁村)を経て、新垣は非常に危険なところと聞いていたから、新垣を通つて、真壁村同字(ドウジ)に行つた。しかしそも適當な壕がないし、お神屋(小さな祠一ほこら)に入つて、そこに入つた夕方、何か知らんが艦砲みたいのが五、六メートル先に、赤木の枝をへし折つて落ちて來た。わたしは前方には爆風よけ、砲弾よけにニクブク(ねこだ—糞縄で編んで作る大きな筵。ねこぼこ。)を張つてあつたんですからね。

から狩り出しを受けて、後原の近くの大里村の屋宜というところのアシャギ(大和言葉の「足掻げ」、母屋でない離れ、前の家)から米を担いでですね、夜、雨の降る中を玉城村の糸数の壕へ行くのですが、途中には、樋川の音を聞くところもあって、富名腰、糸数の軍の壕に行つた。行つたらこれはまた素晴らしい大きい壕ですね。壕の内は蚕棚みたいに大勢の兵隊が寝起きできるようであった。

この壕には重傷患者も相当沢山いた。蚕棚みたいなところに寝かされていた。今の北中城村熱田の人という防衛隊の重傷者が三名いたが、この人たちは、安里ゲン吉さんが、喜倉場小学校の教師時代の教え子といつたが、わたしは別に名は聞き憶えなかつた。

それから、やはり後原にいた時、ゲン吉さんと、それに宜野湾の人二人、四人で、具志頭村同字の自然壕へ重傷患者を運搬させられて行つたことがあつたが、運搬して行くと、看護兵が軍医であるかわからんが、その負傷兵に向つて曰く、「貴様、なぜ自決しないでそんなに迷惑かけるか」といった。そうしたらその負傷兵は泣いていた。そこも糸数の壕と同じく大きな壕で重傷患者が入つていた。

これもやはり後原にいた時のこと。ナンドー嶽(なだけ)という山の下の墓におつたですがね、上に爆弾が落ちてですね、大変な大きな岩が落ちて来たんです。幸いにわたしたちの墓は助つたが、もしこれが墓の上に落ちたら四家族全滅だった。その大きな礫石は、墓を飛び越して、下の川を堰き止めてですね、水が溜つて池をつくつたんですね。五月の大雨の時には、わたしたちのおる壕は五、六尺上にあらんですが、そこまで水が来ました。前川ガラガラで、何百人の人間が流されて死んだのはその時だった。これは話を聞いた(この

そうしてそこにいる時に黄煙弾を撃ち込まれてですね、土みたいなようなものですが、すぐ燃えおつたんです。隣りには茅葺屋があつて何名かの人がその中に避難していたんですけどね、これには中城村の人はいなかつたと思うんですが、その黄煙弾で燃えた家の火が消えたので後から行つて見たんですが、三、四名の人が焼け死んでいた。

真壁の同字に四日くらいいたが、避難民はいっぱい、それに死んだ人ははずいぶん沢山見ましたね。

それから、そこにもいられないので、糸満に行くつもりで出たんですがね。伊敷という部落に行つたが、伊敷部落に行つた時には、もう夕暮れになつておつた。

わたしたちは、具志頭後原から出た時も昼で、首里を出た時も昼で国場あたりで暗くなつた。

それで伊敷に来たら、あそこはもう怪我人が沢山出でですね、子供を負ぶつて道端に倒れている人もいたが、伊敷の前にイトマワシという壕があつてですよ。その壕のところを経て糸州、喜屋武・山城の、手前の糸州、そこに来たのが夜でした。それで翌日見たら屋敷いっぱい死人です。それでも行くところはないからね、我慢して生きていたんですが、親がわたしに相談して、水を飲ましてやれということになつたので、わたしが水を汲んで来たんですがね、水を飲んですぐ死にました。右股の骨がはじき出て、出血が激しくて

駄目だったんだす（こゝで誰かも死んだというが、部落と氏名がテープで判らない）。

そこで、六月十九日に捕虜になつたんですが、明日捕虜になると、う日にですね、農業組合の専務の比嘉永俊さんに偶然ここでいつしよになつた。

それで比嘉さんに、この連中をどうするかと訊いたら、そうしたら比嘉さんは、この戦争はどうしても敗けるから、もう仕方がないからアメリカが来たら手を上げたら許してくれるから、そうする、といわれる。それでこの組合の金や証書をどうするかといって、同じ村の新城カヘイという産業組合の、三名で、適当の蛸壺壕さがして。

註、和仁屋の座談会で、比嘉永俊さんが話された、農業組合の現金と証券、証書などを甕に入れて埋め、それをあたかも死者を埋めてあるように見せ、鉄兜を被せ、比嘉永俊の墓という墓標も建てたことと同じことが話された。終戦なつて、比嘉永俊さんが遺骨取りに行つたことも同じ話がなされた。

糸数には一週間いました。お産をした次女は、食糧がないので、乳は出なかつたが、赤ん坊に絶えず乳房を含ましていた。

その翌朝はアメリカは上の山から来ておる。アメリカは上の山から下りて来るとき笑つていたんです。久場のドウモトさんもいっしょでしたですよ。

捕虜になつてから比嘉さんといつしよではない。もの伊敷へ、

伊敷から國吉、真栄里、糸満、照屋を経て糸満に辿りついて、わたしは足の股に破片が入つて、負傷して、破片が入つた今まで、何か

のことが多かつたんですね。

上陸前の戦争協力や供出は他で話されているそうですから、それは略しましてですね、中城村字奥間部落のことを簡単にお話しします。

上陸の近づいた頃は、部落に、若い男はほとんど残つていらない状態ですね、兵隊検査は、適齢者もとよりですが、繰り上げ検査もあって、十八歳から二十歳までは、ほとんど全部の男子青少年が合格で、直ちに入隊しますし、現地召集も一回、二回、三回と予備役が召集されました。防衛隊がやはり三度があつたのではなかつたですかね。それで十七、八から五十二、三歳までの男は、残つていなかつたわけですね。

三月二十五日ですね、北上原の一六一高地陣地がありました。そこは最初は賀谷部隊が駐屯していましたが、賀谷部隊は喜舎場の学校に移動しましたので、その後、一大隊の亀川中隊が守備していました。

その二十九日にですね、部落の残つた男を全部集めてですね、陣地の周りに地雷を埋める作業を命じられたわけです。それは夜間作業です。この作業には、他の部落からもきました。穴を掘つて埋めてですね、甘蕉畑から枯葉を集めてそれを持つて来て、判らないよううに梱装してですね、さらに、友軍に間違いが出ないよう目にじるしをしたんです。

供出関係、食糧関係、労務の供出は役場から割当が来るんですけどね、わたしたちの奥間字では、完全にすべて命令通りやり遂げました。供出で特別なのは航空隊への物でした。野菜も一番いいもの、

木で打つようになつたがさわって見たら血が酷く出ている。それで糸満に来てからアメリカ兵が綿帶をしてくれて、そこからトラックで伊良波の収容所へ。伊良波で女と男と分けられて、その晩は一晩中雨に降られて、翌日はまたトラックに乗せられてどこへ行くかわからない。

そうしたら越來村同字に下された。仲宗根山戸という人が区長で、元の村長だった人でしたが、あの時からは、股の負傷が痛んで作業に行けないので、病院に行つた。その時の医者さんは、あの〇〇さんだったが、この中の破片が具合が悪いから取つて下さいとお願いしたら、「お前、そのまましておけよ、もう年は五十も余つておるんだし」と方言でいってきませんでした。

それでこの人に頼んでは駄目だと思って、そこに知つてゐる看護婦がいましたので話しましたら、奥の方へ行つて来て、わたしを奥へつれて行ってアメリカの医者に見せましたら、これは取り出さればいけないといって、取つてくれました。

註、以下、ほとんど他の人か他の座談会で話したことと同じ経路を取つてるのでこれで止めることにする。
終りに三十一人いっしよだったのがバラバラになったこと。
眷に抱れてお産をした次女の夫は防衛隊に取られたが、どこで戦死したか、とうとう帰つて来なかつた。そして壕の中で生れた女児は二十五歳になり国際大学を出たことが語られた。

伊波盛徳（四十歳）字奥間区長

わたしの場合は、区長の立場の沖縄戦の上陸前の方が、いろいろ

それに里芋みたいな特種なもの鶏など、特にいいものということですね。豚も收めましたが、豚は一般の部隊も同じでした。

労務は、動員の方から、飛行場へ何人、陣地構築へ何人という具合に配分するのですがね、一方が終らないのに、同じ人が動員されることもあるつて困りましたね。

その時兵隊たちからよく聞かされたことは、君たちは君たち自分の郷土を防衛するのだからどんなことでもやるべきだ、と言われるのでした。これは絶えず兵隊たちに聞かされる言葉でした。

そうして労務の時は、帰さないです。飛行場建設の時ですね、帰さないもんだから、交渉を行つたもんです。陣地構築の場合は、上等兵くらいのが来るんですよ。その時は毎日割当てて来るんですけど、二重割り当てで来る場合も多くありました。役場から来るのですが、現在行つてゐるのに、また何部隊に行けと人間一人が二か所へ行かねばならないような指令もあつたんですよ。
やはり二十七、八日頃だったと思います。五月の砂防工事のために、つまり山の泥土止め工事を予定して、その材料を部落に船一隻分運んであつたんです。運搬貨共に二百六十円分でした。現在の金にすれば、七、八百弗になります、諸物価を比べて見ますと。それは十二、三尺の杭を作つてあつたんです。ところがそれを部隊が全部取り上げ、バラ線を張るために、運んで行つたんです。それで部落は金を出して損したわけですね。

四月一日に隊長が朝ですね。北上原の一六一高地に物見台がありますから、そこへ望遠鏡を持って、うちも連れて行つて、状況を見せて下さつたんです。

その翌日の四月二日の朝ですな、その時には比嘉、島袋から伊佐、喜友名ですな、こっちから大体見えますよ、その部隊の配置なども。そうして小銃の煙りですな、それで前線はどこだとはつきりしていました。

それでその晩、家族を連れて、大里の西原（大里城趾のつけ根にある部落）の方に避難しました。それで向こうに行ったら、区長に軍からの命令であつたでしようね、こっちにいる避難民は住所、氏名と年令を明記するように、命令されておつたんですね、それであちこちの壕を廻っていました。そして狩り出します。向こうで、六十五日いました。ここで毎晩のように弾運びです。それは裸弾です。小谷・新里（佐敷村）の北がわの耕地の中に製糖小屋があつたんですね、製糖小屋の中には弾積んであるんですから、それから大里城趾ですな、今の大里公園、あつちに野砲陣地があつたから、あつちへ毎晩二回ずつ運ぶんですね。

「もし騒いで足音を高くしたら敵の電波にかかるからゆっくりして歩くように。もし騒いでころんだりしたらこそ大変だから、よく注意して歩くように」

信管はまだつけてないんだが、騒がさないと考へだつたでしょうね。

それで山に上つて、一晩がそこにいたんですが、その山の上からは、敵艦の埋めている中城湾はすぐ見えますからね、日本のあの特攻隊ですな、あれが直撃して行って火を吹くのを幾度も見ましたよ。

弾運びは、各壕から狩り出されて、三十名くらいでした。一晩に六軒ありましたので夜はその一つに泊めて貰つて、星は山の中に隠れていきました。

山から出るよう、二世を通じて呼びかけていました。それでみんな出るようになりました。

わたしは、べつに捕虜になつたということではなくて、そのまま終戦になりましたからね。

終戦になつて二、三日後、六月の二十五、六日だったと思ひますが、作業に出よと集められてですね、死体片づけですな、あれに出されたのです。

わたしたちの班は健児の塔のあの左がわの山ですね、健児の塔に下りるところの左がわの山でした。翌日は具志頭の部落の西がわ、あの健児の塔の付近。その時は、酷かったです。この調子（両手の指をくつづけて十の指を並べて見せる）で、重り合うくらいにくついて死んでいたですね。掘ろうとしても穴が掘れないですね。もう人間が重つてゐるんですからラ擅葉とか藤鉄の葉とかで被うくらいしかほかなかつたですね。皆で葬つてくれと二世の方から達しがつたんですがね。日本兵の武器は、全然なかつたですね、とうに取り去られていて見えなかつたですね。健児の塔と牛島中将の自決したところとの間に長靴を穿いた兵隊が倒れたのを葬らざなかつらうとしたら、これは捕虜だから止めなさいといつて葬らざなかつたですね。

そうして部落の西がわに行つたら、煙の溝に散開したように並んですな、何十人と死んでいる、疵しているでもないがどうしてこんなに死んでいるかなと思つたですね。

二回運ぶのですが、そうするには、大抵夜の明け方になりました。

この弾運びは、十晩くらいやらされたですね。そこにいた中城村の人は、うちの家族が九名、わたくしの兄夫婦とですな、それから奥間からもう一家族、伊集から一人ですが、そのうち男は三名だけ、残りは女子供だけですね。

それから弾ですが、わたしたちが大里城趾に運んで残ったのは、防衛隊が首里に運んだんですね。馬天から与那原に廻る平坦な道は歩けないから、大里城趾を越えて行つたんですね。

その弾運びとはまた別にですね、そこには幾つも壕がありましたが、敵弾でやられてもそこは、堅固なところで、それで軍は出て来まして、食糧が残つてゐるのをですね、それを取りに引っ張られて運びに行つた場合が二、三回ありました。その時はほんとに往生しましたですね。

それから、六月の十一日には知念に下りました。それまでは重砲隊はいました。重砲隊は、引き上げてから民家に入つていました。部落の家は、それまでは残つておりましたが、兵隊が入つて五日ほど経つてから、一軒残らずやられて、大里城趾からずつと眞白になつて、敷きならしたようになつてきました。

わたしが知念へ行つた道すじは、大里城趾から、親慶原を通つて、小谷・新里の上から具志堅（知念村）へ行きました。家族二人は隠れているところをアメリカに見つけ出されたんですがね、わたくしたちは、具志堅部落の上に屋取り（本部落と離れて二、三戸あるいは四、五戸、時にはかなり多い戸数があることもあります）が五、

健児の塔に行く上に今、売店がありますね、あつちは広場になつたが、黒くなつた人間が、まるで薪でもつんであるように、あちこちにありましたよ、これはブルドーザーで集めたんだなと思ったですよ。

壕にも行って、死んだ人を出させて埋めさせられるが臭くてですな。そこにいた人は兵隊と民間人がまさつていましたが、兵隊の方が多かつたですね。

それから恐かったのは、爆風にやられた女ですね、まる裸身で大抵仰向きに大きくて真黒で、非常に恐かったです。

註、伊波さん一家は、戦闘被害をまつたく知らない幸運に恵んでいる。それは、大里城趾の、重砲隊陣地の西がわにある大里村西原部落へ避難し、それから知念村の太平洋岸の具志堅部落へ落ちのびたからである。大里城趾の戦争は、防衛庁防衛研究所、戦史室著の『沖縄方面陸軍作戦』にも出でないし、沖縄でも当事者外には、その実状が知られていないが、米軍へ最後まで抵抗し、特異な戦争をしてくる。伊波さんが、知念村への脱出が六月十一日といわれるの、当つて、上記戦史の付図五、米軍進出経過図が五月三十一日に落ちていいの、半面の予定で、それより二週間くらいの時日、一部の守備隊に守られていたことが生存者たちによつてはつきり証明されている。

大里城趾の陣地を本部として拠つていていた重砲七連隊、樋口大佐を連隊長とする球四一二五二部隊には、現地召集によるほとんどの未教育兵が、沖縄本島の全域から召集されている。

その母体はほとんど大阪出身の中年兵で最下級兵が兵長、上等

兵だったのに反し、現地召集のほとんどが一つ星の二等兵、重砲七連隊の悲惨な戦争における沖縄同胞の犠牲を他府県同胞の生存戦死者と比較して見よう。

他府県 生存者

一〇四人 駐、同十九年までに老齢召集解除者も相当含む。

同 戰死者

一八三人 約七〇人

沖縄出身生存者

約七〇人

同 戰死者

二五八人

他府県出身も沖縄県出身者も戦死者数は現在の調査では偶然にも同数だが、生存者は他府県出身者が可なり多い。

沖縄出身者には戦死者にも補助看護婦がかなりの数あって、生存者数には補助看護婦の非戦闘員が多く含まれている。

この調査は同連隊生存者の実地調査によるもので、九十%以上が確実性があると思われる。

要害、後方に拠る重砲連隊で上記の犠牲を出している沖縄出身、現地召集兵だから、一線部隊に加っている未教育現地召集兵や、防衛隊、戦闘協力者、学徒隊等の犠牲者が、いかに多かつたであろうことが推察できる。

伊波さんのお話で、大里城趾重砲隊について述べておられるが、伊波さんは大里村西原境内から、米軍進出五月三十一日の線外の未進出地である重砲隊が一応引き揚げた佐敷村小谷（字）の上方南の稻福（大里村）を通って、それから（字）新里の上の台上をすぎ、親慶原（玉城村）部落から知念台地を通って、知念村具志堅に避難されたものと察しられる。それから捕虜として米軍の目にちつとも止っていらない。これ

行って、また退所時間になると、もとに戻して、そういうふうにして事務を取っていましたが、その当時印象に残っているのは、熱田の下の海に松の木を伐り出して、兵隊があの海につかって作業をしていたことです。何かこれは南部あたりに、壕なんかに使用するのではないかと思いましたが、日本軍がよく熱田の海の中で働いていました。中部はその時、松の木が多かつたからここから切り出して南部あたりに運ぶんじやないかと思いましたがね。渡口部落へ通つている途中にいつも見ることでした。

それから、朝は行つて、壕から戸籍簿を運んで来る。また帰りはおさめて来るというような繰り返しでありましたが。それから市町村に勤めているものから中頭勤員所が採用したいといふが、どうですかといったから、もう戦争も目前に来ておるし何もうする必要もないだろうと言つたが、あまりすすめるもんだから、あの普天間にあつた中頭地方事務所といつところに、中頭勤員所といふのがあつて、そこに働いていました。そこで職員は壕を掘れといふんだから、いざとなつた場合は、わたしらは中城からそこへ行くこともないんだが、しかし執務中でも空襲があつたらどうなので、それは掘らなければならぬでしようといつて、壕を掘つてあつたんです。

しかしよいよ空襲が激しくなつてからは職場も放棄して、自分の部落にいたんです。わたしたちの伊舍堂部落は、部落の周辺に壕があつて、ほとんどの部落民がその部落周辺の壕にいましたけれど、あの具志頭村ですかね、あそこで艦砲が始まってから十日以内にこっちも危険になるというので、山嶽地帯、今の中城公園のあと

は、南部で苛酷な戦禍から辛じて逃れた哀れな人びとが、捕虜として知念村へ移されているのに偶然にも混同したからである。しかも幸運なことには、同じ知念村に付けて来られた捕虜で、太平洋岸はそのまま移動されずにすんだのに、中城湾向きの部落へ移動させられた捕虜住民は、久志村へ移され、食糧のために多くの老幼が栄養失調で死に、またマラリアの蔓延で多くの人が犠牲になっている。

伊波さんのような方は、これまでの座談会で例のなかつた珍しいことである。

重砲隊が引き上げた壕からの食糧運搬は、たぶん重砲隊が稻福部落に移動してからのことである。談話の通りそこに撃ち込まれる艦砲を初めてするあらゆる火器の激しかつたことは委しくわたくしも調査して資料を持つていている。

知念村出身の女子青年で小谷の上を通つて大里城趾へ弾を運んだ人たちも現存している。

比嘉岩雄（四十五） 県属中頭地方事務所勤員所

十・十空襲の時からのことです。城趾内の役場で、今北中城村の助役宮城善八さんと二人で戸籍を担当しておりました。が、十・十空襲がすんで後、ここでは書類の保管ができないということで、渡口部落の事務所のクラブに書類とともに役場職員全員、向こうに引っ越して執務しております。

その当時、朝行つて、島袋の下の壕に戸籍簿を詰めた箱を運んで

で延長したあの広場、あそこに自分等の墓があるもんだから、そこに衣類も食糧なんかも運び上げて、自分等の墓を開けて入つてしましました。ところがわたしたちの墓はマチ墓で、掘り込みでないから、爆弾でも落ちたら大変でないかなと思って、晩はそこに寝て、昼は役場の下の洞穴に行つておつたんです。

そこで話を聞きましたが、島袋あたりまで敵が上陸して來ているので、万一の場合には、この書類を全部焼き捨てて、退却しなさいという指令、話し合ひをしてあつたもんですから、ああ、これまでになつたかな、今までこんなに保管した戸籍、土地台帳なども、もう無くなるのかなと思った。もうその時は、わたしは戸籍や土地台帳などの役場の責任者ではなかつたが、それでもやはり毎日身近なにして来た帳簿には愛憎の情がありました。

それから軍がわれわれのところへ来て言いました。「首里方面まで避難して置けば、それまでには戦さは勝つから、軍への協力という意味から早く首里方面へ行きなさい」というもんだから、うちを出てこの中城城跡の隣りから首里に行くというので弁ヶ岳の下まで行つておるけれど、せんせん壕の見当のつかないところへ行つてさまとたら困るではないかなと思って、西原村の翁長には、縁故者があるので、そこへ引っ返して行つて、その墓に入つていました。この縁故者は家族が多くて、どうしてもわれわれまでいつしよにいられない。それで隣りに古い墓があつたので、そこを開けて入つたんですがね。そうしたら、幸地部落の方が来て、ここはわたしの墓であるから出なさい、といつて出されてしまいました。

それで、また今度は隣りに小さい墓があつたので、そこを開けて入

ることにしました。そこは、元の西原村役場の上になっています。

そこには、長いこといました。わたしは月日は、はつきりは判らなくなっていますが。

それから、そこが激しい砲爆弾に見舞われるようになりましたので、とうていおられないから南部に行こうと言つて、南風原村の喜屋武部落に行きました。

あの南風原村の病院ですね、その病院の隣りに壕があつて、そこに入りました。そこには日本軍が入つていて、わたし等のいつしよの西原村棚原の方で、娘さんが軍で看護婦をしておるという家族でしたが、その看護婦の家族といつしょということ、わたしらも兵隊といつしょにその壕に入つて行つたことができました。

兵隊は、その壕、南風原村の喜屋武部落からですね、与那原辺へ

攻撃にしばしば出かけて行くを見ました。

兵隊が敵へ攻撃を行つてゐる時でした。その壕の主が来て、ここはわたしの壕だから出なさい、なんぞ君等はここに入つておるか、といひで、夜が明けるまではいらさせて下さいと頼んで見ました。が、壕の主は、それは出来ない、早く出て行けといつて、とうとう出されたので、それから防衛隊のいる壕を行つて一泊して、翌日はそこを出て、友寄、山川、与座を経て、真壁・新垣まで行つた時は夜が明けて、わたしには八歳になる子供がいましたが、その子供なんかは、そこで一休みしようといつたら、道端の草の上にじきに寝込んでしまいおったんです。

註、友寄、山川は、多分東風平村の友寄部落のことと思う。あるいは、当時は南風原村の山川部落を通つて友寄部落へ行く道があ

金はあまりもつていませんでした。それで西原、南風原までは物を持つて來ていたので自由に食べたが、真壁・新垣に來てからは、とてもそういうことはできない。その部落の方を頼つて、どこの畑から掘りなさいといつて、自分で掘つて來て持ち帰つて、料でかけて、金を払つてやりおつたもんだから、幸いにいつしょの家族が本当に持つていたので、その方から借りて遣つておりましたんですがね。馬なんかも屠殺すると、それなんかも金を出して買うといつたようだ、金がなければいけなかつたのです。

そうしてその部落の区長さんあたりは、馬の堆肥を持ち出しへ、芋を掘り取つた後畠を耕作していましたよ。

それから何日くらいしてからでしたか、夜中頃、壕にあるものみんな、何歳という年齢と、家族が何人いますかとしらべていたんですね。そうしたら、女の連中は、ここは配給があるらしいよと話していました。それからまた来て起されたんです。それで何ですかといつて出て見たら、何時までに真栄里の部落に集合といふんです。それでわたしの家族は、働き手はわたしひとりしかいないので、わたしがいなくなると、芋掘りに行くことはできない。長男は航空兵として嘉手納飛行場に入隊しているし、下の子供たちには食糧を考えることのできるものはいない。これは困つたことになつたと思ったが、仕方がないから、つれの方によろしく頼みますといつて、出て行つたんですけど、そうしたら教員の方も翌日は協力しないといわれたといつて、わたしのところへ来てしまつた。

いよいよ大変なことになつたな、いったい子供等はどうなること

あたり前になつてゐたかもしれない。部落名、地名を対にして呼ぶのは沖縄の昔からの言い方で、凡例でも説明されるだろう。与座は、具志頭にも同名の部落があるが、ここの与座は、与座岳の下の糸溝町の与座であることが、後に出てる真壁、新垣といふのから推察される。真壁、新垣は、やはり対語で言つたので新垣部落をいつているのだと思う。

それからそこの地形がよくわからないもんだから、もっとさきの方に行つたらどうかな、いいえ、もっとさきの方は海になつてゐるらしいよというて、まだ夜が明けてないもんだからわからんで、真壁・新垣の前の製糖小屋でご飯を炊いて食べて、それから真壁・新垣のクラモトといふうちのアシャゲ(離れ)を借りていましたが、まあその頃までは弾もないで、ご飯も炊いて食べることも出来て、また後の山に行つて足を延ばして坐つて坐つて出来おつたんです。

ところがそれから何日くらい経つたでしようかな、怪我人が出て、やられておるんだよという話があつたんですね。そこでもわたしといつしょの方は、わたしの部落の教員家族と、それからこの小学校長(中城村)だった島袋盛輝さんと与座川のところで出合つていつしょでした。島袋先生は別になられて、わたくしたち部落の教員と二家族だけでしたが、そこで驚いたことは、お金についてでした。それは、戦争が始まる前までは、手持ちの金は全部貯金しなさい、國への何といつたですか、五十円一口だつたと思ひますが、あんな貯金をして、また自分等としても戦が来てからは金は遣うこともないでしようといつたかつこうで、手持ち

かと心配でなりませんでした。

それで、軍の方では、いつも雑炊をくれていましたので、わたしは、それを弁当箱に入れて持つて、子供等の壕へ行つてくれました。自分は生半をかじつたりして軍の方へ帰りおつたんです。壕は与座岳で、仕事は真壁の方面に行きおつたんですから、家族はその中間の新垣におつたんですから、立ちよることができました。そういうふうにいつも寄つていたんですが、ある日いつものように立ち寄つたら家族はない、それでその主人に、どこへ行つたんでしようと訊いたら、玉城村の船越にたよりがおるとむこうへ行きましたよといひ。それでわたし軍協力の仕事は晚だけですから、昼間に立つて川底は深く、普段は水がないので、その川底にも避難民がいました。それで仕方がないとあきらめいでいたが、また何日くらい経つてからだつたか、真壁・新垣に廻つて行つたら、家族が帰つて来ておつた。それは、わたしが家族をさがしていたと聞いたので、元のところがいいといつて帰つて來たということであった。そうしてまた何日かして行つて見たら、またまたいい、今度はどうしたのかと思つて、いつしょの教員が、わたしが早く後に戻りなさいといつてやつたという。それは、前行つたら危いから逆にうしろに戻りなさいと軍は公表していますので、といった。そして家族たちは、豊見城村の母根へ行つてゐたそうです。

それでわたしは、軍の前線から下つて来る弾薬の片づけですね、

壕がないから煙に下して、甘蔗の葉とか木の葉とかを折って被せる仕事だったのですがね、それを長らくしておる中に、もう与座岳にもおられないということになつて、そこからずっと南の方へ進んで行つたんです。そこはどこだったかわかりませんが、兵隊が、君等はそこに休んでいなさい、壕をさがして来るからといって、どこかへ行つてしましました。ところが、いつまで待つても帰つて来ません、もう絶対に帰つては来ないというので、解散するよりほかに仕方がないなといつて、解散しました。

それからは各自に避難民といつしよに、あちこちさまよい歩いたが、最後に喜屋武村の福地という部落の製糖場へ来ました。その製糖場は屋根はなくて、釜だけだったんですね、その釜に、北中城村の郵便局長さん、それからお医者さんの大田さん、現在の北中城村の議會議長の宮城盛彌さん、喜屋武セイコーさんという方等がその釜に入つてゐるのを見たんです。その時に、うちの部落の若い者が、もつとずっと前の喜屋武部落に行つたがいいから行きましょうといつていて、いや、ここに知つた方がたが多勢おられるから、こっちがいい、ことに安里永太郎さんなんか英語にも通じていろいろもなく捕虜になつたわけです（捕虜になるのを無意識に観念していられたのだろうか、安里永太郎さんの英語に云々の点）。

家族はわたしと七名でしたが、金貢無事にこの戦争をしのぎました。あの豊見城村の座安、伊良波につれられて行つた時に、安里さんのお父さんがアメリカ帰りで、そこで通訳をしておられましたが、ちょうどお目にかかるので、うちの家族は、どこへ行つたかが、ちようどお目にかかるので、うちの家族は、どこへ行つたか

してこの比嘉さんの家族が、全然無事でこの激烈な戦争をしのいでいるのは、比嘉さんが戦争協力させられたのが、まだ南部へ脱がれて来た避難民が激しい米軍の攻撃の行なわれない頃、偶然、米を相当量手に入れ、他の人たちにも分けてやり、家族は、それ等の部落民と、戦争の死角だった砲火の洗礼のなかつた与根部落に早く脱れていたのが幸運を得たのであると思われる。

新垣 盛繁（五十一歳） 西原尋常高等国民学校長

わたしの方は、西原におつた関係で、西原の村民といつしよになつたんですが、戦場には行つていません。

三月の何日だったか、日時は記憶していませんが、西原から御真影を奉戴して、羽地村（北部西海岸）の稻嶺へ行きました。それは、県下の小学校の御真影を稻嶺小学校に集めることになつて、その護衛隊長は、琉球海運株式会社の社長で先頭亡くなつた渡嘉敷真睦さんです。

それより前に、島田知事からの命令で、各村非戦闘員は、疎開させることになつて、西原村は、久志村の二見から汀間部落までが疎開地でした。中城村はさつきお話しのように、三原から安部・嘉陽その一帯でした。

それでわたしは、御真影奉戴の帰途、まず西原村の疎開地をひとり廻つて、それから家族がどうなつてゐるかと思って、訪ねて見ることにしました。

わたしの家族は、最初は瀬嵩に疎開させてあった。仲地家という

おりませんといつたら、いや、もう、とうに全員無事で行きましたよ、とおっしゃつて下さいました。わたしは、ああ、家族は生きていたかと、何だか今まで圧しつぶされていたように暗かった気持ちが、まるで急に夜が明けた心地といいますかね、ほんとかなという気持ちもしました。子供は五名でしたが一名は入営していました。

これはいつしよではありませんでした。

食糧は、わたしなんかこの東海岸から山嶽地帯へ持つて上つてから西原にいったもんですから、何も持つてないんです。そんな生活でした。わたしの親戚の元中城村の村長さんだつた比嘉喜俊先生なんかも、真壁・新垣といつしよになつたが、その先生のところなんかも、誰も芋掘りに行くものがいなくてですね、その辯さんがわらしといつしよにいましたが、辯さんに米をさがしてくれと頼んでいました。しかし米はどこにもなくて、大変困つておられました。

捕虜になつてからは、安里さんがおつしやつたように、座安・伊良波の集合地に集められて、トラック十台に全部乗せられて越來部落に移されました。

越來部落では、最初は一軒の家に百名くらい入れられておりましたので、そのうちにいる時は朝早く起きないと用便もすることができぬといった状態であつたんですよ。

そうこうしているうちに、山原（北部）に行つてゐる家族をさがして、つれて來ていっしょにいることが出来るようになりました。

註、その後のことは、北中城、中城村の人びとはほとんど同じ生活、同じ月日をすごして自分の部落へ帰つたようである。そう

大きな家があるんです。家族は子供が六女と長男、次男、父と家内とこれだけがそこにいたんですね。

それで訪ねて行つたら、空襲されて、僕等はその家の後に穴を掘つておつたが、あのグラマンの機銃掃射が激しいんだね。その時に西原の玉那納という家のお母さんが、わたしたちの近くの茅葺家の中において、機銃弾でやられて死んだんですがね。うちの方でも非常に危険なことがあつたんです。ちようど六女のケイ子といつて今北中城の教員をしておるが、それのすぐそばを機銃弾が通つて、すぐそこにあつた斧の柄に当つたんです。ほんの少しで酷い目にあうのを免まぬかれたんですね。それで、どうも危険でいられないので、汀間部落に移つたんです。そこは福地家といつうちでした。

そこにはしばらく滞在しておると、西原の学校が空襲で焼けたという情報が入つたんですね。そうしたらちよどその時に、西原の村長の古波津セイコウという人が、学童は宮崎に疎開させてあるが、お母さんと小さい子供を汀間部落に疎開させてあるところから、自分自身で砂糖五挺を運んで來たんです。それでその馬車があつたので、それに乗つてですね、翁長の出身の村会議員をしておつた玉城という人といつしよに帰つて、行って見たら学校はどうもない。それでしばらくして、二十七、八日（三月）頃だったと思うんですがね、慶良間に敵が上陸したということを聞いたんです。その情報が入つたもんだからこの玉城が、さあ国頭へ行きましょうといつ。いや、お互この村民をすててはいけないんだと、わしはがんばつたんだが、いや、どうしてもいくといつ。それでわたしにも娘ひとり、四女で二高女の一年でしたが、次女は二高女の三年生で特志看護婦

で応召されていた関係などもあって、玉城夫婦とともにその娘をつ

れて、四人で西原から午後の七時に出で、瀬嵩に着くまでちょうど三日間かかったんです。昼中は山に隠れて、東風納の東がわに蘇鉄山があるが、昼中そこに隠れていたんですがね、そうしたら、石川（現在の石川市）がさかんにやられて火事が出ている。そういうするうちに夜になつて、夜になるとグラマンも来ないんだから、北へ向かつて行く避難民が、当時は道もないから七日旅をすつと行列ですよ。つづいて歩いてですね。そうして翌日の朝、久志小の後の山に隠れて、三日目の十時頃ですね汀間についたのは。行つて見たら

いない。どこに行つたかと訊いたら、山に避難しているという。

瀬嵩から移つて汀間にちよつといつた時、西原の学校を案じて行く前でしたが、汀間の方も空襲があつたんですね。汀間についたのは、今は橋がかかつておりますが。そこに伝馬船があつたんです。避難してあつたんですが、それにどんどん機銃掃射と小さい爆弾を落して割つた。そういうふうに空襲は、激しかつたんです。うちの家族が山へ避難した次の日だつたそうです。家族のおつた福地家庭に爆弾が落ちた。大体直徑が五メーターくらいの穴があいている。わたしはそれを見て、いあんぱいに避難したなと思った。それから山に行つて見た。みんな山に引きあげている。そこで戦争中生活したんですね。そうして川べりだから水は豊富にあるし、その点は恵まれたわけです。

そこで一つの変つたことは、敗残兵がおるんですよ。鉄砲をつかつたのもおるし、かつがないのもおる。避難民のいるところを往復するんですよ。何か食いつ物をねらつてですね、区長をさがして、何

蘇鉄の食べ方は、乾燥させて、それを水につけて、醸酵させて、

よくできたのを煮る、もちろん味噌や塩で味をつけて。それが当たり前のやり方だが、何しろそんな悠長なことをしてはいられない。なまの蘇鉄を削つて、川に二、三日漬けておいて、それを海から汲んで来た潮水で味をつけるほかに仕方のない状態だから、食うにも食えないのを食べなければならないというひどい食糧難でした。とにかく毒にならないものは、目に見える限りのすべてのものを食べたんですね。クバ（ピロウ）の葉の芯、根もとの白いところは、これはうまいですよ。

蘇鉄を食べる前は、名護へ行つて、男は行けないから、家内と爺さんと、それから娘と三名、いつも芋取りに行つた。それがある間はよかつたが、蘇鉄を食つ始めたからうちの父なんかも浮腫みがでた。それでこれは大変だと思って、各西原村民のところを廻つて訊いて見た。

「米はあるか」

「戦争は必ず勝つから、勝つて帰りがけに食べる」

蘇鉄を食べ、青い物はあらゆるものを見つめて浮腫んでいても、西原の一般民は純真でそんな気持ちだったんですよ。

七月の何日だったか、山から下りなければ大砲を撃つぞと脅されて全部山から下されたが、それがもう一週間か、長くて二週間山から下りるのが遅ければ、ほとんどの人が栄養失調で死んだishio。それは日本の終戦まで二週間くらいしか経たなかつたと思う

を供出しろといつて強制するんです。

そうしてわたしのところへ奈良県の坊さんでしたが来たんです。わたしは、村長から貰つて砂糖を一挺持つていたので、その砂糖を少しづつくれたんですね。そうしたらつきとわんざわんざ貰いに来るんですね。どうとうるさくなつて、もうくれない、われわれも大変なんだからと断つたですが、それがだんだん詰られて、当時の汀間の区長は、非常に困つたんです。集めてやらねば、やるぞと鉄砲を向けて脅迫もする。結局集めてくれてやらなければならなかつたんですね。

それからわたしは、時とき西原村民のところを廻つて、どうですか、食糧はありますかと訊いていたんですけどがね、それがだんだん詰つて、青い物はすべて食べてしまつておるんですよ。田の草も海のホンダワラまでも。それからヘゴ（食べられるのはヘゴ類の中のヒカゲヘゴ、別名アヤヘゴともいいう多和田真淳さんによる）ですね。ヘゴは何よりもうまいですよ。あつちはそれが多いから、全部食べてしまつた。それからは蘇鉄取りに。蘇鉄は嘉陽にしかないから、みんなが嘉陽に行くんですね。嘉陽まで二里（八糠）くらいありますかな。そこから担いで持つて来るんですね。山道だから坂もひどいんですが、伊佐ゼンシンさんなんかも、坂道から蘇鉄を担いで運んでいましたよ。わたしの方は叔母、比嘉榮繁の母がおつたので、削つて、作つて置いて、乾かして、軽くして袋に入れて持つて来るようになつた。みんなが塩も味噌もない、それで晩になると、汀間の浜に潮汲みに。ところがこの潮水を入れて味をつけた蘇鉄といったら、それこそ食べられたものではない。

ので、七月の下旬頃でないですかね。

佐敷と知念は大川に、瀬嵩は中城と西原の連中がいたですよ。全部で四万人といつていていたんですけどね、実際は三万人くらいでしようね。

山を下りてからの配給は、全部トウモロコシで、それを粉にしてからお粥にして食べる、実にみじめなもんですよ。瀬嵩でも、子供たちはですよ、腹を大きくして、乳飲み児というのには、ほとんどいなかつたんですね。全然いらないです。それから終戦直後の正月に、これではいけないということになつて、伊藤という二世がおつたんですね、それから比嘉秀正君、その二人が前原に行つてひとつメリケン粉を貰つて来ようという、伊藤氏はいい男でしたよ。それでじや行きましょうといつて前原に行つたんですね、そうしたら倉庫長が天願テイ順さんです。どうしてもくれない。ところが前原は、正月前で豚肉なんかもどつさりある、煙草も潤沢にある。

それであつちに行つて印象深く感じたことは、妊婦を見たことです。久志では、妊婦というのは全然いなかつた、見たこともなかつたから、高江州小学校の前の道を通つている女がね、でんでん腹をかかえて通るんですよ、珍しい不思議な感じさせました。

そうしてわれわれのいるところは、前原には妊婦がいるのを不思議でならないくらい困っていたんだが、容易にはメリケン粉をくれない。ねばつてやつとのこと十袋だけ貰つて、市役所員などを主として配りましたがね。

それからわたしは、大川部落の区長になっている伊波嘉三君から、労務課長にするから来てくれと呼びかけられましたので、大川

に行くことにしました。伊波嘉三君というのは、戦前は久志の小学校長をしていました。出身は中頭の嘉数だが、奥さんが大川の出身のところから、大川の区長に来ました。行って見たら、今琉大にいる大城実君が労務課長になると言いました。それじゃそりない、同じ五合の配給だから何でもいいといって、衛生課長になつた。そうしたらそれが大変なことで、ずいぶん死人が出るんだ。マラリアが蔓延して、最初は一日に七、八名十名も死ぬ。最初は人夫を出して穴を掘らしていたが、それが間に合わない。しまいには各自で穴を掘つて埋めさせなければならなくなつた。まったく何んともいえない悲惨なもので、畠に入れて、まるで死んだ動物でも運ぶようにして、とにかくどうにもならなかつた。

それから衛生講話をやつてくれといふので婦人を集めて話しかすることにした。そこで質問応答が今もよく印象に残つてゐる。

「ねえ先生、いつまでもこのようなものでしょか、もう五年はかかりますかね」

「いや、それは、近い中に帰れるから心配する必要はないよ」

「ねえ先生、わたくしたち月づきの生理がありませんが、いつまでもこうでしようか」

「いや、それは栄養失調ですね、まあ、いつまでもそんなことはないよ、心配しないでいいんだ」

わたしは気安めの答えをしたが、実は、女性が栄養失調になると、性というものがなくなることを始めてわかつた。

それからもう一つ気がついたのは、あのような境遇におると、若い娘たちも、羞恥心がなくなることですね。それは、十七、八くら

いの娘たちが、真昼間に、乳房をまる出しにして、平氣で浴びているんですね。全然羞恥心がない。

仲地といふ家の屋敷にみんな各おの小屋をつくつて、百二十名いた。わたしはその家の母屋にいたが(H・S)君なんか、わたくしとちようど向かいのアシャゲにいた。彼は、大変贅沢な生活をしていましたよ。魚なんかもあるし、酒も自由にあるし、わたしとは目と鼻の近い向かい合いで、その贅沢な生活がよくわかるんですが、わたしたちはちよとでも分けて贈るということはなかつたですね、生めかしい女とアメリカ兵がよく出入りしていましたよ。

このH・Sは特例で、前に述べたが、瀬嵩を中心として、久志村一帯の食糧事情は、極限のひどい生活をした。それで前原では非常に贅沢で、あそこにいる人はみんな肥つてゐる。小さい子供等もいた。あたり前に過している。瀬嵩市の管内は、ほとんど小さい子供はいません。わたしはちよと瀬嵩に行つてから次男が一歳の誕生を迎えたが、長男は三つの年ですからね、このような乳飲み子がおつたので、学校におつた時、配給のミルクがあつたんですね、普段は何とかして、それを全部貯えてもつておつたんです。それで山を下りてからもそのミルクがあつて、あまりひどい瘦せ方もさせないですんだんす。それから米や芋についても、戦争前から節約して、後日に備えることは努めていたが、それでもみんなと同じく、蘇鉄やいろいろの名も知らない草や海草を食べたことは前でも話した通りですよ。

マラリアのことで言い忘れたが、わたしを大川部落に呼んで、衛生課長にした伊波嘉三ですがね、彼は区長であつたので食糧で栄養が、これは部落座談会や北中城村のところでも出たので割愛することにする。

ここで明らかにして置かねばならないのは、談者の話の抑揚や、感情の現れ、語感などが、上記の談話でよく当時の事情を表現していた。しかしそれを筆写すると、それは表現されない、読者にそれが伝えられないのは遺憾である。

今一つ、校長で、これまでの座談会に出席者がひとりもまだなかつた。それで、戦前の小学校教育と戦争との関係などをつづけて貰うこととした。

校長には、御眞影奉安所があつて、そこから取つて来て、それを奉戴するには必ずフロックコートかモーニングをつけて、白手袋をはめねばならない。その御眞影を式場に安置して、三大節をはじめを行つたんですね。

当時、ニザの蒲原に、政府が何か、配給所があつた。その労務課長は兼島由明さんで、その兼島さんから、安谷屋は教員がいなかったという非常に危惧をいだいてそこに来たんだそうだ。それで誰でも久志の生活から脱却しようとみんな焦つておるけれども、それがなかなか許されない。

当時、ニザの蒲原に、政府が何か、配給所があつた。その労務課長は兼島由明さんで、その兼島さんから、安谷屋は教員がいなかったという非常に危惧をいだいてそこに来たんだそうだ。それで誰でも久志の生活から脱却しようとみんな焦つておるけれども、それがなかなか許されない。

国の公立小学校には写真が配られ、それを御真影といった。この御真影は、最初は、ほとんど校舎に特にその安置所を作つて、それを前にして全校児童を集め、安置室の扉を校長が開いて最敬礼（膝くらいまで頭を下げる礼）をし、式場司会の先生の号令によつて最敬礼をさせ、それが終ると、君が代の国歌を歌い、再び最敬礼をさせ、校長は勅語を読むのであるが、児童全員は、勅語を校長が読み終るまで再び頭を下げさせられる。やがて待ち兼ねていた「御名、御靈」の終りを告げる言葉で、「頭上げ」の号令と共に、压えつけられていた児童たちは解放され、咳払いや溜息やしづらきを一斉に出す。

天皇をこのように神格化していたので、もし学校が焼けて、天皇の写真を学校といっしょに燃やしたら、その校長は責任を取るということで免職で職を追われるくらいではしまなかつた。文士の久米正雄の父が信州上田市の小校長で、この災難に遭遇して、責任を取るということで自殺したことは当時國中に知れ渡つていた。

それで天皇の写真は、校長に取つてこのように恐ろしいものであつたから、学校が焼けても、天皇の写真が焼けないよう、校庭の離れたところに土を盛り上げて、コンクリートの焼けない小舎を造つて、そこに入れて置くように、いつの間にか日本全国の小学校がこのようになつてゐたようであった。

西原の学校関係を話すと、戦争の始まらない前に、最初武部隊が來たんですよ。体もいいしね、よく働きおったんです。それは台湾へ移動したので、その後に石部隊が來た。

師団長が本郷義夫という有名な本郷房太郎大将の長男だったが、この人は親切ない人で、児童の木の下の野外教授を見て、わたしのところへ来てね、先生お気の毒です、といつていましたよ。それからわたくしがあの時の軍隊でいやと思つたことは、わたしの住宅と工兵隊の炊事場がね、くつついていて、よく兵隊の食事の状況がわかるんですよ。魚の供出がある。豚の供出がある。ご馳走があるんですが、これは下士官以上の人人が全部食べるんですね。そうして兵隊は、塩とご飯だけをくれていましたよ。佐藤といふ少尉がいましてね、わたしに親爺と呼んでいましたが、親爺また飲まんかといって、日本酒もご馳走も持つて来るんですね、わたしの住宅に。それでわたしは、軍隊というものは面白いところだなど思つた。

それから齊藤チカ三郎という特務曹長が、歩兵隊におりましたがね、新潟出身ですよ、それと非常に仲よしなつていて、いよいよあすは出陣という夜でした。これが最後になるかもしれませんから今夜は飲みましようと住宅へ来てくれましたがね、戦争に生き残つて復員したとききましたので、新潟市役所に、さがして貢うように依頼した。しかし出来るだけ手を尽したがどうしても見当らない

西原の学校は、校長住宅を中心にはさんで、八学級ある分舎と、分校とはいわないで分舎といつたですが、それと本校とがある。本校はわたしが行つてから新築したんですよ。百坪四教室の式場教室として（中扉をはずして式場とした）。

そうしたら、その新校舎に、児童は一日も入つて勉強しないで兵隊が入つてしまつた。そこは歩兵大隊で、分舎は工兵隊、歩兵大隊の隊長は支那から來た少佐でしたが非常にいい男でした。その大隊長が胃腸傷害で、本土へ帰つたんです。そして、その後に三浦という大隊長が來たんです。

その時わたしの校長住宅は八疊と六疊の離れがあつて、気が利いた廊下なども通つていてちょっとよかつたんですね。それで副官がきて、隊長のためにそこをぜひ借してくれといふので、いいだらうと掃除も奇麗にして待つてました。そうしたら隊長はこつちには泊らない、女を二人連れているので、これもここにいるんですけどと訊いたら、いや、それは遊びに來ておるんですけど、小那霸へ行つて民家にいましたよ。女は沖縄のもので多分那霸あたり、辻の女ではなかつたですかね。

それから五年以上の児童はですね、部隊の兵舎作りの協力です。連玉岳の方へ出かけての茅刈り作業です。授業はやりません。先生もいつしょに、あの一帯の草をあるつたけ刈つて、兵舎作りをしました。それで、その作業の金が五千円になつたんですが、この金をどうしようか、皆に分けても少しずつしか当らないが、と話しましたところ、高等科の一人の生徒が、先生。これは時金して置いて戦争が勝つた後で、戦勝記念館を造りましよう、と言つた。それでこ

という返事を貰いました。いまだに安否がわかりません。戦争当時の学校関係はまあこんなもんです。

かれは実にいい思いつきだといつて、校長名儀で時金しました。わたしは小学校時代からの写真も全部家内といつしょに疎開させてありましたので、この貯金帳も現在持つています。それで西原村にも郵便貯金が取られるようになつたら返して上げると言明してあります。しかし五千円は当時ですと百坪の会館ができましたが、現在ですと、十四弗余りですね。

師団長が本郷義夫という有名な本郷房太郎大将の長男だったが、

この人は親切ない人で、児童の木の下の野外教授を見て、わたしのところへ来てね、先生お気の毒です、といつていましたよ。

それからわたくしがあの時の軍隊でいやと思つたことは、わたしの住宅と工兵隊の炊事場がね、くつついていて、よく兵隊の食事の状況がわかるんですよ。魚の供出がある。豚の供出がある。ご馳走があるんですが、これは下士官以上の人人が全部食べるんですね。そうして兵隊は、塩とご飯だけをくれていましたよ。佐藤といふ少尉がいましてね、わたしに親爺と呼んでいましたが、親爺また飲まんかといって、日本酒もご馳走も持つて来るんですね、わたしの住宅に。それでわたしは、軍隊というものは面白いところだなど思つた。

それから齊藤チカ三郎という特務曹長が、歩兵隊におりましたがね、新潟出身ですよ、それと非常に仲よしなつていて、いよいよあすは出陣という夜でした。これが最後になるかもしれませんから今夜は飲みましようと住宅へ来てくれましたがね、戦争に生き残つて復員したとききましたので、新潟市役所に、さがして貢うように依頼した。しかし出来るだけ手を尽したがどうしても見当らない